

英文学読み直し (1)

— Margaret Tyler と Jane Anger —

小柳康子

I

「英文学史」という名称の科目は、日本全国のほとんどあらゆる大学と短大における英文学科のカリキュラムに開設されている。「米文学史」も同様だと思われるが、筆者が英文学専攻であるため、本稿では「英文学史」に限定して話を進めてゆく。しかし、「英文学史」という時、「英文学史」と「米文学史」の両方が考えられている場合もあることをまず断っておく。

「英文学史」は、各時代の小説家や詩人の作品を読んだり研究したりしてゆく際に、知っていると助けになる時代背景や、作家と作品についての基礎的事項を学生達に教える授業と一応はいえるだろう。「英文学史」は「英文学の歴史」であり、コマ切れの知識を羅列して教え込む場であってはならないということが理想としてはいえるであろうが、授業が歴史の専門家によって担当されているのではない以上、また、学生数と彼らの意欲のレベルとも関係して、現実の講義が理想とするところからずれてしまいがちになるのはいたし方あるまい。

「英文学史」で使用されるテキストは、どの出版社のものでもほとんど変わらない。Anglo-Saxon の文学から Chaucer の中世を経て、Shakespeare のルネサンスへ。そして Milton の 17 世紀から小説の発生をみる 18 世紀。その後、ロマン主義を経て 19 世紀の詩と小説へとゆき、現代とひとくくりにされている 20 世紀へ。ここには、しかし、筆者の経験による

と、毎年絶対にたどり着くことはできない。担当者の専攻や興味の広がりによって、時間をかけて講義される時代やジャンルが異なることがあっても、現在出版されている「英文学史」のテキスト（テキストを使用しない場合は、担当者の頭の中のテキスト）の流れに沿った授業展開になるのはおおむねまちがいないと思われる。

この「英文学史」の講義の上に、学生達が更に深く、あるいはより専門的に作品を読んでゆくことが想定されて、現在の大学と短大における英文学科のカリキュラムが成り立っているのである。このカリキュラムにある「英文学」の専門科目で使われるテキストは、それゆえ、講義、演習、セミナーを問わず、「英文学史」の中でとりあげられた作家のものになるのは自明の理である。担当者が大学院で何を専門としてきたのか、あるいはまた、担当者の現在の興味の方向に基づいて、「Shakespeare の *Hamlet* 研究」や「ロマン主義詩人 Keats の詩」が通年授業として展開されてゆくのである。

さて、あまりにも自明の事のように思われる事実をこのように説明してきたのは、筆者の英文学研究者としての今までの立場を確認し、それをふまえて今後の研究方向を再構築してみようとする意志による。英文学の研究者であると同時に、英文学を若い学生達に教授する教師である筆者は、「英文学史は、はたして現在ある形のものであるべきなのか？」という問いと、「英文学とは一体何を教える学問なのか？」という問いを、原点に立ち返って、改めて自分に発してみる必要性を自覚せずにはいられないからである。

筆者のこの問いは、日本の大学と短大における「英文学」のカリキュラムに対する学生の意識の変化と、1991年の文部省による大学と短大の設置基準改正を受けて、あるいはすでにそれ以前から始まっていたカリキュラム改編への様々な動きと無関係ではない。筆者が大学教育を受けた1960年代初頭から時代が大きく変化している中であって、「英文学」も全くそれ

らの動きと無縁のものではあり得ないはずだとの思いがある。「英文学」が今後の日本の高等教育機関という場においてどのように位置づけられ、教え研究される必要があるのかを考えることは、ひとり筆者にのみ課せられた課題ではないであろう。

更にまた、この「英文学史」を含む「英文学」の現状に対する問いは、1960年代以降、英米のアカデミズムの中で様々な形態をとりながら続けられてきている新しい理論と実践をまのあたりにした、日本人研究者としての危機意識のあらわれでもあるのはいうまでもない。

この20数年のあいだに英文学研究のパラダイムが一変してしまった現在、1960年代に大学で受けた英文学の読みを、何の問題意識も持たず続けてゆくことへの反省がここにある。一例をあげる。イギリスロマン主義の詩人 Wordsworth の詩を、そのイメージと音の面から解釈するとか、彼の手紙や妹 Dorothy の日記を読んでその意味を探るとか、神話や聖書や古典や他の詩人の影響との関連において考えてゆくという形の研究は、その中味が優れたものであれば、当然高い評価を受けて然るべきである。しかし筆者は、このような研究の前提として、なぜ Wordsworth がいまの英文学史の中にあのような中心的な位置を占めているのか、また Wordsworth の詩の研究をすることがなぜいま私達日本の英文学研究者にとって必要なのかを問題化することが重要であると考えてるのである。

「英文学」の現状に対するこの問いは、今まで我々が教えられ受け入れてきた英文学の総体——キャノン——に対する疑問符であるのは自明であろう。そしてこのキャノン英文学あるいはキャノン英文学史への疑問符は、必然的に、今まで不当に無視されてきたり忘れ去られてきていた「女性の書きもの」(このあとは「女性のテキスト」という語も使用する)に光を当てる作業へとつながってゆくことになる。この「女性の書きもの」の掘りおこしと新しい角度からの研究は、フェミニズムあるいはフェミニズム批評の二大実践のうちのひとつであるのは言うまでもないだろう。

1960年代以降、英米のアカデミズムにおいては、様々な理論が登場しては消えてゆく過程が繰り返されていった。日本人研究者が、外国の最先端の理論を知りそれを英文学研究に利用しようとした時には、それはすでに流行遅れとなっていたという笑い話のようなエピソードは、一種の神話として今でも繰り返されるものである。しかしフェミニズムは、これらの文学研究理論や方法論とは、はっきりと一線を画すものであると思われる。フェミニズムは、キャンオン英文学に適用される理論としてよりは、むしろ、「女性のテキスト」を現前させるための理論として、この先ずっと我々と共にあり続けるであろうからだ。

1991年の『英語青年』4月号の特集「文学史の読み直し」は、日本の英米文学研究者に大きなインパクトを与えたにちがいない。この特集の巻頭エッセイである荒木正純氏の「English の制度物語——文献解題 1981-1991-」は、イギリスとアメリカにおける制度としての「英語英文学 (English)」への「英語英文学部」内部からの問い直しと将来への展望を、重要な3つの論集: 1) *Literature in the Modern World* 2) *Encyclopedia of Literature and Criticism*, 3) *Re-Reading of English* を中心に、きわめて明快に分析している。これを読めば、キャンオンたる「英語英文学」が、いかにしてイギリスという国家の要請の結果として制度化されていったのかが了解されるのである。この特集では、この巻頭エッセイを受けて、フェミニズム、マルクス主義批評、新歴史主義、大衆文化という各視点からの「文学史の読み直し」が概括されている。⁽¹⁾

この特集は、日本の意識的な英米文学研究者達が、アメリカやイギリスのアカデミズムで主流となっている理論を、後追いついて紹介しているという読まれ方をされるべきではあるまい。1990年代のいま、英文学の母国ではないアジアに位置する日本の大学や短大で「英文学」を研究し教授するという自らのよって立つ基盤をふまえて、「英文学とは何か」を問い直す契機とするものとして読んでゆく必要があるのではないだろうか。

1988年から1989年における筆者のハーバード大学留学体験によっても、この「英語青年」の巻頭エッセイで論じられている問題は身近に感じられた。これを考えてみるために CLCS (*Center for Literary and Cultural Studies*) のセミナーで読まれた Gerald Graff の “Theorizing the University”⁽²⁾ を検討してみたい。

Graff は、リベラル・アーツのひとつの科目としての文学を、制度としての面からと学生に教授する教育としての2つの面から、非常に精力的に問題化しようとしている学者である。このペーパーにおいて Graff まず、アメリカの大学における「人文科学」(“Humanities”) 特にその中でも文学研究の現状を分析しつつ紹介する。ここでは、従来存在していた共通認識である研究者間の “common spiritual values against a vulgar materialist society” (11) が無くなり、一種の “disagreements” (6) が現われてきていることが指摘されている。大きな地殻変動が大学に起きているということである。

A state of affairs arose in which those who think of themselves as members of a literary culture found they disagreed radically on first principles. This climate of disagreement generated a theoretical metadiscourse that has shifted attention from works of literature themselves to questions about the nature of literature and its conditions of creation, reception, and cultural dissemination, or that made it more necessary, when speaking of the works of literature themselves, to take into account the cultural and philosophical conditions of the discussion. . . .

(2-3)

文学研究の方向が、文学作品そのものから、文学とは何か、それがいかに生成されどのように読まれてきたか、そしてどのように伝達されて今日まで残ってきたのかということを解明するものへとシフトしてきているとの Graff の説明は、何の変哲もないことばに聞こえながら、実はいま我々

が直面している大きなパラダイムの変化を語っているのである。ここには、文学を無色透明な自足的体系としてではなく、社会と文化とのダイナミズムの中で、歴史的産物とみなしてゆく見解が述べられているのである。そして Graff は直接的には言及していないが、ここには当然、主体の絶対性の否定という側面もあるはずである。従って、フェミニズムと並んでこの先も有効な理論であり続けると思われる新歴史主義の影がここから浮かびあがってくる。

文学研究と教育についての2つの大きな葛藤は、当然何をどのように読むのかというキャンソンの問題とも密接な関係を持っている。

Take the current conflict between those who argue that reading and teaching literature should remain a primarily literary activity and those who argue that the very category of the 'literary' is already necessarily political, that the very distinction between literature and ideology is itself deeply ideological, functioning as it has to the advantage and disadvantage of particular social groups. It is this conflict that underlies the controversy over the canon and the great books, where what is at stake is not simply which books students should read, but how they should read them ; Here is but one instance of the deep division which has destroyed the once tacit agreement about what the study and teaching of literature is all about. (5-6)

ここで Graff の述べているように、アメリカの大学では現在、文学の伝統的な立場を守ろうとする側と、文学をイデオロギー的に理解しようとする側との間に激しい葛藤・対立が続けられている。しかし Graff の関心は、この2つの対立のどちらに自身をコミットさせるのかにではなく、混乱状態にある文学研究と文学教育を、どのように大学教育に反映させてゆくことができるのかに注がれている。そして彼は、これらの様々な意見の相違を統一しようとして不毛の努力を重ねるよりは、むしろこの対立や葛

藤をそのまま学生に示して、彼らに自分達の置かれている状況を自覚させることが必要だと提案するのである。

Here would be a solution to the Great Books Debate which now rages across the land: teach the debate. The solution to the problem is to teach the problem. What is needed is a structure which does not merely expose students to a variety of different theories, interpretations, and ways of contextualizing texts, as happens now, but initiates them into the ways in which an intellectual culture negotiates and transacts such differences. (19)

このように、葛藤をありのまま学生に示して、文学のキャノンを含む文化の多様性に眼を開かせ、そのような社会の中で自らの生きる意味を考えさせようとする Graff の姿勢はまさにアメリカ的であるといえよう。そして Graff は、これが不毛のニヒリズムや相対主義をもたらすものではないことを信じて疑わない。

II

「英文学読み直し」とタイトルを付けた本稿は、今までキャノン英文学史でとりあげられることの少なかったイギリスの「女性の書きもの」あるいは「女性のテキスト」を、継続的に論じてゆこうとする試みの第1回目のものである。なぜこのような「英文学読み直し」を企てるに至ったのかはIで大体言いつくしたが、ここではそれらを、もう少し具体的に説明してみたい。

筆者が大学の英文科に入って以来今日まで、読んだり研究したりしてきた作品は、ほとんど男の作者により書かれたものであった。しかもそれらは、メジャー／マイナーという区分によると、いわゆるメジャーとされる作家であった。彼らは要するに、英文学の‘big name’なのであった。

いまだに忘れることのできない大学時代の話がある。それは「風と共に去りぬ」を卒業論文に選ぼうとした先輩が、教師に止められたというエピソードである。これは多分実際にあった話ではあるまい。しかし、一種の神話として残っているこのエピソードには、非常に大きな意味が隠されていることは明らかであろう。それは、英文学の中にある、作家のみならずジャンルについてのキャノンの存在を雄弁に物語っているからである。20数年を経た今、事態は変化したであろうか？

真面目な研究に値するジャンルと作家についての我々の無意識に張りめぐされたキャノンのネットワークを語る Lillian S. Robinson のことばを聞いてみよう。

As with many other restrictive institutions, we are hardly aware of it until we come into conflict with it; the elements of the literary canon are simply absorbed by the apprentice scholar and critic in the normal course of graduate education, without anyone's ever seeming to inculcate or defend them.⁽³⁾

ここに明らかにされている通り、英文学キャノンは、若い研究者の周囲にそれと意識されない一種の「拘束的制度」(“restrictive institution”)として存在し、その「構成要素」(“elements”), すなわち個々の作家であり作品であるものは、何の抵抗もなく自然に受け入れられてきたのである。Robinson の言葉を引用したのは、フェミニズム批評の典型としてであり、フェミニズムにコミットする研究者のすべてが、キャノンの拘束性と規範性に異議申し立てをしているのはいうまでもない。

また、このキャノンへの疑問符は、新歴史主義の立場からもつきつけられているのは周知の事実である。I で言及した『英語青年』1991年4月号の「文学史読み直し」の特集で、高田茂樹氏がこれを次のように説明している。

このように見れば、キャンノンとしての評価を得た作品、一つの時代の支配的イデオロギー、そしてまた両者の関係は、それぞれの時代においても、また、それらを研究の対象にする後の時代にとっても、いかに確固とした完結性、水も洩らさぬ網羅性を装おうとも、常に無数の矛盾と葛藤を秘めて、新たな解釈、新たな批判と評価に曝されているのである。新歴史主義が研究者に提起する課題とは、それゆえ、常にキャンノンと規範の絶対視を避けて、それらの生成の現場としての主体、文化的規定性を被りつつそれらを変えてゆく歴史の担い手である、作家と解釈者の主体のありようを明らかにしてゆくことであり、既存の規範の確認と固定化のための主段としてではなく、規範との葛藤を秘めた連関の中でそれ自体の固有性を育むものとしてのテキストのありようを解明することである。⁽⁴⁾

このような英文学キャンノンへの異議申し立てをふまえ、筆者は「女性のライティング書きもの」すなわち、「女性によって書かれたテキスト」をこの『紀要』誌上でとり上げてゆく予定である。

III

さて、この「英文学読み直し」の企てを開始するにあたって、過去から現在までの自己の立場を確認し、今後の方向を模索するという意図で書いてきた、かなり個人的な序論の最後に、この「企て」について考えておかなければならないことを、その限界と可能性をも含めてまとめておく。

1. 「女性のライティング書きもの」とは何か？

「女性のライティング書きもの」は、「女性が書いたテキスト」であり、これは生物学上女性として存在する人間の書いたもの、ということである。しかしこの単純な定義に従って「女性のテキスト」をとりあげる時、いくつかの問題が生じてくる。たとえば、ルネサンスやそれ以降によくみられる女性の偽名によるテキストや、男性によって大幅に修正を加えられて出版された女性のテキストを、我々はどう扱えばよいであろうか？また更に、書かれたものではない演説や告白をも、ここに含めてよいだろうか？筆者は、女

性が書いたと一応は考えられている偽名のテキストも、男性の手が入ったテキストも、本来は書かれたものではなかった語られたテキストも、すべて含めて考えてゆく立場をとるつもりである。このような方針の結果、「女性のテキスト」が一握りのエリート女性の手になるだけではなかったことが明らかにされると考えるからである。この問題に関しては、イギリスで出版された *A Biographical Dictionary of English Women Writers: 1580-1722* (1990) の **critical appendix** に、非常に示唆に富む指摘がされている。この辞書の3人の編者 **Maureen Bell, George Prafitt, Simon Shepherd** は **critical appendix** で、**Catholic** から **Presbyterian** に改宗した17世紀前半の **Helen Livingston, Countess of Linlithgow** の死の床での「告白」についてふれ、当の女性が話したとは思われないことばが彼女の死後発表された経緯を説明している。そして彼らは、このような「告白」をも「女性のテキスト」に加え読んでゆくことによって、キャノン文学史の根底をなす著者（作者）中心の文学という暗黙の前提の限界性が明らかにされ、「女性のテキスト」が、男や体制側によって、ある目的のために利用されてゆくメカニズムを白日に曝すことができるとしているのである。⁽⁵⁾ ここからも、フェミニズムの提起したキャノンの見直し、拡大、あるいは切り捨てが、偏狭なイデオロギーに基づくものではなく、英文学研究者である我々すべてに、豊かな研究領域を与えてくれるものであることが了解されるといえよう。

2. とりあげる女性：どこから始めてどこまでゆくのか？

いま現在決めているのは、ルネサンスの女性から始めるということだけである。この理由は2つある。ひとつは、筆者のこれまでの研究から出てきたもので、あとのひとつは、留学や学会参加という外的なものから出てきたものである。

筆者のこれまでの英文学研究者としての仕事は、主としてロマン主義の

詩人達をめぐってなされてきた。Wordsworth, Coleridge, Keats, Shelley, Byron という、いわゆるメジャーな詩人達を読み、論文を書いてきた。特に Byron についての論文の数は一番多い。これらの研究から明らかになってきたのは、18世紀後半から19世紀なかばという現代に近接した近代イギリス社会における文学者の問題を考えるには、イギリスの近代の萌芽であるルネサンスを抜きにしてはむずかしいということである。近代社会における個人の運命に早くから気付き、自意識の先鋭化されたロマン主義の詩人達は、ルネサンスという、個人と社会との葛藤を自覚的に促したのであろう時代と、しっかりとつながっているという感じがするからである。

またアメリカへの1年間の留学によって、ルネサンスと宗教改革時代の女性研究が非常に先鋭的におこなわれていることを直接この眼でふれる機会に恵まれたこと、更には、1991年の東京における「シェイクスピア世界大会」に出席して、欧米のみならず第三世界の学者達による新しい視点からのシェイクスピア研究と教育への取り組みをまのあたりにできたことも理由のひとつである。

この「英文学読み直し」は、ルネサンスの女性から始めて、最終的には、ロマン主義時代の女性までたどり着きたいと考えている。ロマン主義詩人の“big name”の他に、キャンノン文学史からこぼれている彼らと同時代の女性達が、いかに生き、いかに書いたのか考察したというのが今の時点での希望である。こうすることによって、ロマン主義詩人達にも新しい光が当てられるであろう。しかし、クロノロジカルに「女性のテキスト」を読んでゆくとすれば、最終ゴールにたどり着くまでには長い時間がかかるに違いない。

3. 問題点

この「英文学読み直し」の一番大きなネックは、原典が日本では非常

に入手困難という点であろう。最近では、かなりの数の「女性のテキスト」のリプリントが出されるようになってきたが、まだまだ多くの女性は、海外の大学や研究所あるいは博物館などに埋もれているままである。またリプリントされる場合でも、Bell 等の指摘するように、特定の女性作家（たとえば Aphra Behn）だけが、日の目をみることが多い。⁽⁶⁾ 毎年海外へ行き研究することは難しいであろうし、手に入るテキストにも偏りがあるとすれば、筆者のとり上げる「女性のテキスト」には、当然偏りがあることになる。しかしキャノン文学史ではその場を与えられてこなかった「女性のテキスト」は、現実に我々のまわりにみられるようになってきているのだから、ともかく筆者は、それから始めてゆく他ないと考えている。

4. どのような方法論をとるか

「女性の^{ライティング}書きもの」を掘りおこし研究することは、すでに述べたようにフェミニズムの二大実践のひとつであるから、筆者のよって立つ基盤はフェミニズムである。しかしこのことは必ずしも、これからの論文をフェミニズムを前面にたてて書かなければならないことを意味しない。フェミニズムは、現在のところ理論と実践の両方において、英文学研究の領域を大きく広げてくれる可能性を有しているが、ここでの実際の論の進め方は、かなり自由な方法で取り組みたいと考えている。

その始まりにおいてラディカルであったフェミニズムは「女性の^{ライティング}書きもの」をとりあげる中で、教養ある白人上流階級あるいは中産階級の女性のみにも光をあててきたという批判が近年特にみられるようになってきた。性差という面からのみ見れば被抑圧者であり周縁的存在としての女性は、ひとたび階級と人種というフィルターをかければ、たちまち抑圧者に転じるわけである。フェミニズムの喚起した、周縁から中心への浸透はいかほど刺激的なものであったにせよ、当の女性により排除される周縁という構造はまたそこに残るわけである。この時の周縁とはエリートの中産、上

流階級女性より階級において下層である者（男も女も）であり、このようなエリート女性によって抑圧され無視されてきた非西欧の人々である。つまりフェミニズムの規定する、男>女という単純化された図式は、その後のフェミニズムの展開において、限界を有することが明らかになったということである。近年、従来の西欧白人女性中心のフェミニズム批評に欠落していた階級と人種をその視座にとり込んだ新たなフェミニズム批評が抬頭してきているのはこのためである。インドという西欧にとっての周縁である国の出身で、アメリカの大学で英文学を教え批評活動に従事する **Gaytri Chakravorty Spivak** の実践は、この意味で今後大いに注目に値するだろう。

そしてまた今後は、性差、階級、人種という、すでに三点セットとなっていた観のあるキーワードに、新たな項がつけ加わり、フェミニズムの多様な展開がみられるようになるに違いない。固定化された、男>女の関係がつきくずされた後にくるのは、新しいコンテクストの中での男と女の再定義であろう。最近の英文学における **homosexuality** や **transvestism**（服装倒錯：異装）の研究の高まりは、明らかにフェミニズム批評の新領域を告げているのではないだろうか。

最後に、非西欧圏にある日本の英文学研究者としての位置を確認するという意味で、『国文学：解釈と教材の研究』（1992年11月号）のフェミニズムの特集で、我々のいま、に何が必要かを鮮やかに提起してくれた外岡尚美氏の引用で、この序論の締めくくりとしたい。

西欧においても、中流白人女性を標準として性差別のみを問題とすることに問い直しの声をあげたのは、西欧に住むアジアや第三世界の女性、労働者階級の女性、そして同性愛の女性たちだったのである。西欧における女性たちも、人種・階級・セクシュアリティの複雑に作用する中に位置付けられていることが意識されるにつれて、フェミニズム理論は大きく開かれていっている。

このような中でアジア・フェミニズムを口にする時、私たちは、「非西欧」

であるアジア独自の、という枠組を超え、ジェンダー、民族、経済、セクシャリティの諸要素を総合的にとらえる視点を持たなければならない。⁽⁷⁾

IV

Margaret Tyler は、1587年にスペインの^{ロマンス}物語 *The Mirror of Princely deeds and Knighthood* を翻訳した。⁽⁸⁾ 印刷・出版業組合（‘Stationer’s company’）の組合登録簿に出版許可の登録をされたのは1578年であるが、出版されたのは多分1580年であろうと推測されている。⁽⁹⁾

この^{ロマンス}物語は4人の作者によって書かれており、Tyler の翻訳は、この長篇の第1部である。このあとこの翻訳の人気も手伝ったためか、3年後の1583年に別の翻訳者によって第2部が出版された。そしてこの後さらに継続的に翻訳、出版され、1601年の第8巻目をもって全体を終了している。⁽¹⁰⁾

Margaret Tyler がどのような階層に生まれ、どのように生きたのかについては、現在までのところ全くわかっていない。残されているのはこの^{ロマンス}物語とその翻訳者であることを示す Margaret Tyler という名前のみである。この^{ロマンス}物語には、Lord Thomas Howard への dedication と一種の序文である *Epistle to the Reader* が付けられていて、Tyler の素性を考えてゆく時のほとんど唯一の資料となっている。

この Tyler の場合のように、作品以外その素性が一切伝わっていない作者の存在というのは、彼女がルネサンスという、今から400年も前の時代に生きていた人間であることを考えてみれば、それほどめずらしいことではないであろう。しかし現代に生きる我々は、作者とは特定された年月を生き、それとわかる個性を、テキスト以外のそこかしこに残している人間だと考えがちである。そのために、手紙を調べ、彼／彼女に関する他人の言説を捜し、活字となって残っているテキスト以外の場所に、彼らの真の姿を浮かび上がらせることに情熱を傾けるのである。この作業には、しかも、謎解きの与えてくれるようなスリリングな面白さがある。

それゆえ、Tyler の場合にも、この謎解き（素姓捜し）を試みる研究者がいないわけではない。だが今までキャノン英文学史の中ではこの Tyler はあまりにも小さな眼にも入らない程の位置しか占めていなかった（全く占めていなかったのかもしれない）ため、この試みをしているのは、ほんの数人にすぎない。

Lord Thomas Howard への dedication には、Tyler の素姓をほんのわずかだが明かしてくれる言及がある。彼女はなぜ Lord Howard を献辞の相手に選んだのか？

For the manifold benefites received from your honourable parents, my good Lord and Ladie, quickly eased me of that doubt, and presented your honour unto my view: whome by good right I ought to love and honour in especiall, as being of them begotten, at whose hands I have reaped especiall benefit In the mean time this my travaile I commend unto your Lordship, beseeching the same so to accept thereof, as a simple testimonie of that good will which I bare to your parents while they lived, then being their servant, I now doe owe unto their offspring after their decease for their demerits. Under your honors protection I shall lesse feare the assault of the envious, & of your honours good acception, I have some hope in the mildnesse of your Lordships's nature, . . . (53)

ここには、Tyler が今は亡き Lord Howard の両親の「サーバント」 (“servant”) であったことが、そして生前彼等に受けた恩義に報いるためにこの書を献げることが明らかにされている。Maira Ferguson は、dedication のこの引用部分を手がかりにして、Tyler と彼女の仕えた Lord Howard の両親について次のような仮説をたてている。（箇条書きは筆者のまとめである。）

- 1) Lord Thomas Howard の両親が時期尚早の死をむかえたと言及されていることから、Howard 夫妻は Elizabeth I に対する Ridolfi 計画に加担していたかどで処刑された可能性がある。これが正しいとすれば、Lord Howard の父は1572年6月に処刑された Third Duke of Norfolk ということになる。
- 2) Tyler が Lord Howard とその両親に忠誠を誓い自分の書物に対する攻撃的批評への保護を願っているところから、彼女自身ローマカトリック教徒だったことは大いにあり得る。
- 3) これによって、Margaret Tyler の本当の名前は Margaret Tyrrell であるという可能性が、わずかにだが出てくる。Tyrrell 家は有名なローマカトリックで、その一族中に、Howard 家の sister-in-law である Margaret Tyrrell なる女性のいることが知られている。カトリック教徒すなわち国教忌避者 (“recusant”) は、よく変名を使用していたからである。⁽¹¹⁾

Tyler をカトリック教徒であったかも知れないとするこの Ferguson の考えは、妥当な推測だと思われる。女性が学ぶ外国語としては、フランス語とイタリア語が普通だった時代に、スペイン語に通じていた女性という Tyler に、カトリックと結びつくものを感じないわけにはいかないからである。だが、サーバントであった女性が、そもそもいつ、どのようにスペイン語を翻訳が可能なまでに学び覚えたのであろうか？ これに対する答えはまた、新たな推測でしかあり得ないのかもしれない。

Tyler のこの翻訳に付けられた epistle には、女性が物語に手を染めることと、女性が学問をすることについて、きわめてはっきりとした意見が述べられている。そしてそれは、家父長制度の支配するルネサンス社会の支配的イデオロギーに対する、女性の側からの最初の異議申したてでもあった。

Tyler はまず、女性である自分が^{ロマンス}物語をその翻訳の対象に選んだことによって受ける非難を予想して、読者に次のように訴える。

Such deliverie as I have made I hope thou wilt friendly accept, the rather for that it is a womans worke, though in a storye prophane, and a matter more manlike then becometh my sexe. But as for any manlinesse of the matter, thou knowest that it is not necessarie for every trumpetter or drum-stare in the warre to be a good fighter. . . . I trust every man holdes not the plough, which would the ground were tilled, and it is no sinne to talk of Robinhood, though you never shot in his bowe: (54-55)

Tyler はここで、自分の作品が「世俗的な^{ロマンス}物語」(“a storye prophane”)であり、内容が自分の女性という性に似つかわしくないものだけれど、どうぞ好意を持って受け入れてほしい(読んでほしい)と読者に願っている。そして、大地を耕すためにすべての人が鋤を持つ必要はないし、ロビンフッドの大弓を引いたことのない人が彼のことを話すのは罪ではないなどという比喻によって、戦いの経験の無い女性が戦いを題材とする^{ロマンス}物語を扱っても一向に構わないのではないかと主張するのである。このように、男性と女性の間で扱うジャンルに違いがないことを宣言した後、Tyler は、次のように^{ロマンス}物語を選んだことを弁護する。

So if the question ariseth of my choice, . . . wherefore I preferred this storie before matter of more importance. For answer . . . wherein if I should alledge for my self, that matters of lesse worthiness by as aged years have been taken in hande, and that dayle new devises are published, in songs, sonnets, enterludes, and discourses, and yet are borne out without reproch, onely to please the humour of some men: (55)

ここには、印刷術の発達により、多くの低俗なソングやソネットやインターロードなどが日常的に出版され、しかもそれらが何の非難も受けずにまかり通っていることへの痛烈な皮肉がみられる。自分の仕事は、このような愚にもつかない作品よりは 数段上だと Tyler は自負しているのである。

そして Tyler は更に具体的に、男女平等の考えを展開させてゆく。

But my defence is by example of the best, amongst which, many have dedicated their labours, some stories, some of warre, some phisicke, some Law, some as concerning government, some divine matters, unto diverse Ladyes and Gentlewoman. And if men may and do bestow such of their travailes upon Gentlewomen, then may we women read such of their workes as they dedicate unto us, and if wee may read them, why not farther wade in them to search of a truth. And then much more why not deale by translation in such arguments, especially this kind of exercise, beeing a matter of more heede then of deep invention or exquisite learning, . . . (55-56)

ここにあるのは、男性の書く高尚な書物—^{ロマンス}物語、医学書、法律書、政治論、宗教書など—が貴婦人に献呈されているのだから、彼らと同性の女性すべてがそれらを読んで然るべきであるという、きわめて明快な論理である。そして女性がこれらの書物を読むことができるとすれば、それらを学びその中にある真理を追求することが許されるだろうと Tyler は続ける。そうであれば当然、このような分野の翻訳はなおのこと、大いになされてもよい。

この主張の延長線上に、epistle のフェミニスト的言説のクライマックスともいえる以下のことばが現われるのは驚くにあたらない。

But to returne whatsomever the truth is, whether that women

may not at all discourse in learning, for men late in their claime to be sole possessioners of knowledge, or whether they may in some manner, that is by limitation or appointment in some kinde of learning, my perswasion hath bene thus, that it is all one for a woman to pen a storie, as for a man to addresse his storie to a woman. (56)

この部分を、筆者は次のようにパラフレーズして考えてみた。

男と女の間、与えられるべき知識と学問の領域の相違は一体あるのだろうか？ 男が知の領域を独占し、女にはそこへ立ち入ることが許されないのだろうか？ または、ある制限つきで、女が参入を許される知の領域があるのだろうか？

男が^{ロマンス}物語を書き女性に献呈する自由を持っているように、女にも^{ロマンス}物語を自由に書く（翻訳する）ことができるのだ。

このことからわかるように、男と女の間には相違はないのだから、女には男と同じ知の領域が開けている。女は男と同じ学問を求めてゆくことができるのだ。

ここには自分自身が^{ロマンス}物語を翻訳することの正当性と共に、女性が学問をすることにおいて全く男性と同じ自由を有するという Tyler の信念が力強く表明されている。Tyler がルネサンスにおける最初のフェミニストといわれる理由がここにある

以上、epistle における Tyler の言説を、女性と男性の対等性の主張に光をあててみてきたが、Tyler はもちろん、この考えをなんのためらいもなく真向から主張しているわけではない。なぜなら彼女は、4世紀も前のルネサンス時代に生きていた女性であり、その時代の支配的な文化規範から自由ではあり得ないからである。そのため Tyler は自分の信念を主張すると同じ熱意をこめて、自分が受けるであろう攻撃や非難への予防線を

はり、自分の仕事が友人の強い勧めによって始められたことなどを説明している。

たとえば Lord Thomas Howard への dedication で Tyler は、自分の翻訳が友人達の懇願によるもので (“forced by the importunitie of my friends to make some triall of my selfe in this exercise of my translation”), その題材も自分の選択によるものではない (“the matter was offered, not made choice of,”) と述べ、主体の積極的な意志の働きを否定している。またこのすぐ後で、友人達の勧めに従ったものかどうか悩んだことを、次のような具体的なイメージを用いて語る。

The earnestnesse of my friends persuaded me that it was convenient to laie foorth my talent for increase, or to set my candle on a candlesticke, & the consideration of my sufficiencie drove me to think it better for my ease, either quite to burie my talent, thereby to avoide the breaking of thriftlesse, debtes, or rather to put my candle cleane out, then that it should bewraie every unswept corner in my house, . . . (53)

友人達は Tyler に、彼女の才能を埋もれさせてしまわずに、蠟燭台に蠟燭を立てるように（すなわち、仕事にとりかかるよう）勧めたが、Tyler は自分の力量 (“sufficiencie”) がそれにふさわしいかどうかを思いめぐらし、隠しておいた方が良いものを全部見せてしまうことにためらいを覚えたと語る。ここにみられるのは、自分のスペイン語の能力と翻訳という仕事に対する懐疑であるが、もちろんこの言葉は額面通りに受けとることができないことは、すでにみた epistle における主張からも明らかであろう。とすれば、これは「自己卑下を装ったポーズ」であり、一種の自己防衛的姿勢と考えてよい。

dedication と epistle にはこの他にも、自分の翻訳が出版された時に受けるであろう攻撃についての言及がいくつかある。それは自分が Lord

Howard に献辞をする理由を、「自分の作品を守ってもらうため」(“for the defence of my work”) であると述べたり、「これを書かない方がよかったとか、書くのなら神についてにすればよかった」と非難する「私に悪意をいただく人々」(“my ill willers, ... that they would enforce me necessarily either not to write or to write of devinite.”) の存在を語る部分に明らかである。

さて今まで *The Mirror of Princely deeds and Knighthood* の preface である dedication と epistle の中で、この物語の翻訳者 Margaret Tyler が示している「女性としての意識的な立場」からの主張をみてきた。そこからわかるのは、本を書き翻訳し出版すること、すなわち「女性がものを書くこと」と、古典語や外国語を学び人文科学を修めることにおいて、男と女の間基本的な違いがないとする Tyler の信念であった。しかし preface には、フェミニスト Tyler の姿と共に、世間の非難や攻撃に先手をうって弁明につとめる Tyler の姿も同時に見られる。理想と現実のギャップを認識した地点に立って「女性の書きもの」の意味を伝える Tyler に、その後数世紀にわたっての「書きものをする女性」の原型をみることは、必ずしも間違いとはいえないであろう。

イギリスのルネサンスにおいては、中世の開放的大家族から夫婦を単位とする核家族へのゆるやかな移行と、近代国家としてその基礎を固め、王権を中心とした国家体制を作りあげてゆく過程とに平行な形で、女性を慎ましく貞節なものにさせる目的をもつ教育が広く受け入れられてゆくようになった。そしてこの時、人文主義者達の唱えた男女平等の理想は、容易に男性優位のドグマに転化してゆくのである。⁽¹²⁾ それゆえ、このような社会でものを書く女性、それを出版する女性には、Wendy Wall が述べるように常に負のイメージがつきまとう。

In a word in which privilege was attached to coterie circula-

tion and published words were associated with promiscuity, the female writer could become a “fallen” woman in a double sense: branded as a harlot or a member of the un-elite.⁽¹³⁾

このような文脈において、Margaret Tyler の dedication と epistle は、ルネサンスの public と private の関係をはからずも逆照射するテキストとしての意味を帯びてくるといえよう。

V

1589 年に、Richard Jones と Thomas Orwin という 2 人の出版・印刷業者の元から、*Jane Anger her Protection for Women* が出版された。(以下 *Protection* と略す。⁽¹⁴⁾) タイトルからも想像がつくように、これは中世以来の女性嫌悪あるいは女性蔑視——misogyny——に対して、女性擁護をするという形のパンフレットであり、ルースながら、ルネサンスによくみられた「論争」(“polemics”)をなしている

Margaret Tyler の場合と同じく、Jane Anger の素姓もあきらかではない。そのためこの人物の正体をめぐっては、批評家の間にいくつかの説が出されている。Jane Anger を本名とみなす説(‘Anger’ という姓はフランス名 ‘Anjou’ の転化で、当時のイギリスではめずらしくなかったということである)、また中世以来の *Querelle des Femmes* という枠組のなかで女性擁護の論を張る男性の偽名とする説などが提出されているが、現在おおむね定説とされているのは、Anger を女性の使った偽名とし、書き手はこの名前によって misogyny 言説への怒りを表明していると考えられるものである。⁽¹⁵⁾ *Protection* にはラテン語からの引用も随所にみられ、古典への言及も多いため、書き手が男性である可能性が全く否定されるわけではないが、ここでは Anger を女性とみなして論を進めてゆく。

Protection は、中世以来連綿としてヨーロッパに生きてきた misogyn-

yny への女性の手になる反論であり、また同時に、1588年に Stationer's Register に登録されているが今日原作は失われてしまっている *Boke his Surfeyt in love, with a farewel to the folies of his own phantasie* (今後は *Surfeyt* と略す) への直接的な反論という性格を持っている。*Surfeyt* への反論という意味は、この *Protection* が、ルネサンスの文学的伝統である「アンチ・フェミニズム」(「女を卑める言説」)対「フェミニズム」(「女の本来的な素晴らしさを擁護する言説」)の枠の中で、直接的に先行する書 (*Surfeyt*) のアンチ・フェミニズムに対して、それを論駁するフェミニズム的内容を持つことが、あらかじめ仕組まれた形で出来あがっているということである。これは、内容を事前に予想させる *Anger* という偽名を用いていることや、*Surfeyt* が *Protection* を出版したのと同じ Thomas Orwin によって登録されていることから知られよう。また更に本文中には、*Protection* と *Surfeyt* が、Orwin という印刷・出版業者によって、マーケティング上の戦略として巧みに仕組まれた論争であることを明確に示す箇所が2つある。それゆえ *Protection* の中の怒りは、*Surfeyt* の misogyny に対する素朴な怒りであるよりは、*Surfeyt* とセットでこのパンフレットを広く売り込もうとする商業的企業家の方針に沿った、計算された怒りということができよう。だがもちろんこのことは、*Anger* が女性としての怒りを全く持ち合わせていないということではない。

次に、*Protection* 中にある、これら2箇所について具体的にみてゆくことにする。まずはじめは、*Anger* がつい最近入手して読んだ本について語る部分。

Among the innumerable number of bookes to that purpose, of late (unlooked for) to new surfeit of an olde Lover (sent abroad to warn those which are of his own kind, from catching the like disease) came by chance to my handes: which, because as well women as men are desirous of novelties, I willinglie

read over : neither did the ending there of lesse please me then the beginning, for I was so carried away with the conceit of the Gen. as that I was quite out of the booke before I thought I had bene in the middest thereof : So pithie were his sentences, so pure his words, and so pleasing his stile. The chiefe matters therein contained were of two sortes : the one in the disruptive of mans follie, and the other, invective against our sex, their folly proceeding of their own flatterie joined with fancie, & our faultes are through our follie, with which is some faith. (60)

この部分は、*Protection* の中の激しい misogyny 攻撃とは不協和音をなすものであることが容易にみてとれよう。Anger はここで、*Surfeyt* がたまたま手に入り読んだが、それは初めから終りまで大変面白かったこと、文章は力強く、言葉にはにごりが無く、スタイルは見事であることを、そして内容は男の愚かさと女への悪口であるということを語っている。これはまるで、*Surfeyt* の宣伝文そのものののように響くし、実際その意図は確かにあったに違いない。*Protection* の後半では、この姿勢がさらに強くうち出される。

Now sithence that this overcloid and surfeiting lover leaveth his love, and comes with a fresh assault against us women let us arm our selves with patience & see the end of his tongue which explained his surfeit. But it was so lately printed, as that I should do the printer injurie should I recite but one of them, and therefore referring you to *Boke his surfeit in love*.

(67)

愛に飽きた男が女を攻撃しはじめることを書いた本はつい最近出版されたばかりなので、自分がここでその本の内容を引用すれば、印刷・出版業者に悪いことをしてしまうことになるから、詳しくは *Surfeyt* を読んでほしいということがここでは言われている。これはまさに、Anger が Orwin

のマーケティング戦略を担う形で論争に参加していることを表明していると考えてもよいだろう。ここであきらかにされているのは、男性出版者＞女性の書き手という関係である。同時にここに示されているのは、この時期にはすでに、市場原理に支配された商業的出版物が出回りはじめていて、女性が家庭というプライベートな空間で好きなことを自由に書くことから外の世界に足を踏み出せば、いや応なくその原理に組みこまれてゆかざるを得なくなる事実である。これは私的領域から公的領域へ向かってものを書くようになってゆく、17世紀以降の女性達が直面せざるを得ない問題でもあった。

さて、*Protection* の内容を具体的に検討する前に、ここで *misogyny* の問題をすこし考えてみたい。*misogyny* とは、女性蔑視-antifeminism 言説であり、これは旧約聖書や古代ギリシアまでたどることのできる中世ヨーロッパにおける「文化的常数」(“a cultural constant”)⁽¹⁶⁾ であった。R. Howard Bloch は、*medieval misogyny* ということばを *redundant* かかもしれないと断った上で、中世における *misogyny* 言説の広がりをおのうに要約している。

Found in Roman tradition, it dominates ecclesiastical writing, letters, sermons, theological tracts, discussions and compilations of canon law; scientific works, as part and parcel of biological, gynecological, and medical knowledge; and philosophy. The discourse of misogyny runs like a rich vein throughout the breadth of medieval literature. Like allegory itself, to which ... it is peculiarly attracted, antifeminism is both a genre and a topos, or, as Paul Zumthor might suggest, a “register”—a discourse visible across a broad spectrum of poetic types.⁽¹⁷⁾

misogyny は、この Bloch の引用からも明らかな通り、中世を通じて至る所に遍在していた ‘genre’ であり ‘topos’ であり ‘register’ であっ

た。古代ギリシアやローマの哲学者や科学者にも、女性蔑視の言説は無数にみられるが、中世において **misogyny** が「文化的常数」にまで広まったのは、キリスト教の教義そのものに内在するイデオロギーのために他ならない。とりわけ旧約聖書の「創世紀」におけるアダムとイブの記述——イブはアダムのおき腹から作られたこと、イブこそ悪魔の化身である蛇の誘惑に身を任せ、アダムにも自分と同じ罪を負わせたと読める記述——を極端に解釈して、徹底した **antifeminism** の言説を広めた初期キリスト教の教父達の影響は大きいものであったといえるだろう。⁽¹⁸⁾ 彼らの女性呪詛の激しさは、たとえばカルタゴ人 **Tertullian** の *The Appearance of Women*(*De Cultu Feminarum*) の次の一節をみるだけでも明らかである。

The judgement of God upon this sex lives on in this age; therefore, necessarily the guilt should live on also. You are the gateway of the devil; you are the one who unseals the curse of that tree, and you are the first one to turn your back on the divine law; you are the one who persuaded him whom the devil was not capable of corrupting; you easily destroyed the image of God, Adam. Because of what you deserve, that is, death, even the Son of God had to die. And do you still think of adorning yourself and beyond your tunics of animal skin?⁽¹⁹⁾

Tertullian のこの引用に現われるイブ＝悪魔への門の図式は、聖母マリアを対極とする女性像と並んで、その後長くルネサンスにまで続く女性観の根底をなすものであったのはいうまでもあるまい。そしてこれらの相反する女性イメージは、現実の生身の女性を超越したイメージであるという理由で、どちらも **misogyny** というひとつの「定数」から派生してきたとみなしてよい。**courtly love** や **Petrarchanism** の問題とからめて、これは今後の筆者の大きなテーマでもあるが、これを考えてゆく時、従来通りの伝統的な方法論によるものではなく、フェミニズム、新歴史主義をもとり

込んだ新しい視点が必要とされるであろう。

さて、このような社会基層をなす misogyny の遍在の上に、中世、ルネサンスには、“literary attacks upon and defenses of women”⁽²⁰⁾ が、ひとつの文学ジャンルとして成立していた。Jane Anger の *Protection for Women* は、それゆえ、この大きなコンテクストの中で読まれるべき書なのである。*Protection* は、女性の手になる女性弁護の書という点での決定的な新しさはあるが、その内容そのものには、注目すべき革新性はないといえるだろう。これから、*Protection* の中味を検討してゆきながら、女性に対する攻撃と反論の典型を明らかにしてみたい。

この書には2つの dedication があり、はじめのものは *To the Gentlemen of England, health* と題され、2番目のものは、*To all Women in generall, and gentle Reader whatsoever* と題されている。「貴婦人」と「女性のみなさま方」という形で、対象を絞っているこの dedication には当然そのトーンに微妙な相違がある。「貴婦人」にあてたものには、身分の高い女性の前で、自分の仕事の弁明をするという普通の dedication のパターンがみられるが、「女性のみなさま方」の方では、Anger は男性に対する激しい怒りをあらわにしているのである。

まずはじめの dedication で Anger は、自分がこのように「性急に」 (“rashly”) 怒りに満ちた言葉を連らねていることを非難するのではなく、むしろ支持してほしいと訴える。ここで使われているのは原告、被告という法律用語であり、これらの語の使用には、この dedication が向けられている女性達の知性の高さが計算されているといえよう。そして Anger は、自分の大文字の固有名詞 Anger と、小文字の普通名詞 anger とを巧みに使って、この *Protection* がやむにやまれぬ正当なものであることを強調しているのである。

I hope you will rather shew your selves defendants of the defenders title, then complainants of the plaintifes wrong. . . . I will not urge reasons because your wits are sharp and will soon conceive my meaning, . . . But (in a worde) for my presumption I crave pardon, because it was ANGER that did write it: (59)

次の dedication で Anger は、女性が今までいかに男の悪口に苦しめられてきたのかを語り、そしてまた具体的に「女の親切と愛にうんざりした男」(“surfeiters”) ということばを使って、先行するテキストへ反論を試みる姿勢をみせている。

Fie on the falshoode of men, whose minds goe oft a madding, & whose tongues can not so soone bee wagging, but straight they fal a railing. Was there ever any so abused, so slaundered, so railed upon, or so wickedly handeled undeservedly, as are we women? . . . Let the streames of the channels in *London* streates run so swiftly, as they may be able alone to carrie them from that sanctuarie. Let the stones be as Ice, the soales of their shoes as Glasse, the waies steep like AETna, & every blast a Whyl-wind puffed out of Boreas his long throat, that these may hasten their passage to the Devils haven. (59)

ここにみられるのは、はじめの dedication とはうってかわって、激しいアジ演説を思わせる直接的な呼びかけである。また男を「地獄」(“the Devils haven”) へと追いやりたいという表現には、現実のロンドン市街の汚物にあふれた不潔な通りが重ね合わさされていて、鮮明なイメージを使用して不特定多数の人間をつき動かそうとする巧みな工夫がこらされている。そしてこの「地獄落ち」のイメージにはたしかに、中世以来女性に向けられてきた「悪魔とむすびつくもの」という言説の逆転がみられるのである。Anger は、この dedication の最後で、いまこそ女性は沈黙を守る

ことをやめて男性からの攻撃に立ち向かう時だと宣言し、自分の行動に対する同性のサポートを求めている。

Shal surfeiters raile on our kindnes, you stand stil & say nought, and shall not *Anger* stretch the vaines of her braines, the stringes of her fingers, and the listes of her modestie, to answere their Surfeitings? Yes truely, And herein I conjure all you to aide assist me in defence of my willingnes, which shall make me rest at your commaundes. (59)

さて、2種類の *dedication* を書き終った *Anger* は、男性の書くものは、内容より形式を重んじるもの (“*Rethorick*”) であり、彼らは題材にゆきずまってしまうと必ず、失敗しない唯一の主題——女性——について書き始めると皮肉をこめて本文を始める (59)。この男性のテキスト批判は、まさにルネサンスにおいて、公的生活に適合する立派な神士を造りあげてゆくために必要とされていた「修辞学」への批判と読みとることが可能であろう。

次に *Anger* は、男がどうしても長きにわたって女性を貶める書物を書いてきたのかの理由を考え、それはただ男の側にのみ非があるからではなく、女性がきちんと反論してこなかったからと反省する。男はこのためますます増長してしまうと考える *Anger* は、自分こそ今こうして立ちあがり、この女性への不当な偽りの言説に異議申し立てをする覚悟であると宣言するのである。

But judge what the cause should be, of this their so great malice towards simple women. Doubtless the weakenesse of our wits, and our honest bashfulnesse, by reason whereof they suppose that there is not one amongst us who can, or dare reprove their slanders and false reproaches: their slaunderous tongues are so short, . . . that they know we cannot catch hold of them to pull them out, and they think we will not write to

reprove their lying lips: (60)

Protection の本格的な論戦の火ぶたは、「好色な」(“lascivious”) 男達への弾劾から切って落とされる。Anger は Ninus, Semeramis, Sardanapalus などの歴史に名をとどめている肉欲におぼれた王達を、女を陥れた科により有罪という判決を下してゆくのである。そして話をさらにすべての男が持つ女性への邪まな肉欲へと発展させ、「間男された夫の額に生える角という神話」(“mythology of the cuckold’s horns”)⁽²¹⁾ を、トロイ戦争の元となった Helen の夫 Menalaus (原文のまま: Menelaus) を例にあげながら新解釈してゆく。

But that Menalaus was served with such sauce it is a wonder: yet truely their Sex are so like to Buls, that it is no marvel though the Gods do metamorphose some of them, to give warning to the rest, if they could think so of it, for some of them wil follow the smocke as Tom Bull will runne after a towne Cowe. Bul, least they should running slip and break their pates, the Gods provident of their welfare, set a paire of tooters on their foreheades, to keep it from the ground, for doubtles so stood the case with Menalaus, hee running abroad as a Smel-smocke, got the habit of a Coockold, . . . (61)

男が “lascivious” で “lustful” であるという Anger の攻撃は、もちろん antifeminism 言説の常套語である女性の “lust” という観念の逆転であるのはいうまでもあるまい。

この後、先行するテキスト *Surfeyt* の内容を再説明する形で、男と女が相互に惹かれあう関係の本質が次のように明らかにされてゆく。

...., he beginneth and saieth that we allure their hearts to us: wherein he saith more truly than he is aware off: for we woo them with our vertues, & they wed us with vanities, and

men being of wit sufficient to tender of these vertues which are in us women, are ravished *with* that delight of those dainties, which allure & draw the senses of them to serve us, wherby they become ravenous haukes, who doe not onely seize upon us, but devour us. (62)

Anger はここで, *misogyny* に一貫してみられる男は女のよこしまな魅力にひきつけられるという見解をひっくり返し, 男が女に惹かれるのは, 女の備えた徳のためであり, その徳の素晴らしさが男をとりこにするという論理を展開する。だが, このようにして女に引き寄せられた男は, 彼女に最大限近づいたとたんに, たちまち貪欲な鷹となり, 女を捕え食いつくすのである。女は, その徳や優しさという本来備わった美点によって男の心を捉えるものであるのに, 男はこのあまりにもナイーブな無防備さにつけこみ, 女を破滅させる圧倒的な力を発輝するのである。

この引用の部分は *Protection* の核心であると筆者は考える。なぜならこの書を貫く, 男と女の関係の基本的構造がここにみられるからである。それは, 絶対的に優れている女を, 劣った男が力づくで支配する構造として語られている。どのように女が醜悪で欠点を持っているように見えても, それは男との関係性において一時的に女に付与されている非本質的部分だと Anger は自信を持って言いきっているのだから。

女の優位性は, それゆえ, 「創世紀」のアダムとイブの創造神話においても明らかに証明される。

The creation of man and woman at the first, hee being formed *In Principio* of drosse and filthy clay, did so remaine until God saw that in him his workmanship was good, and therefore by the transformation of the dust which was loathsome unto flesh, it became putrified. Then lacking a help for him, GOD making woman of mans fleshe, that she might bee purer then he, both evidently showe, how far we women are more excellent then

men. (65)

イブがアダムより superior であるとする, misogyny 言説とは正反対の説にはいくつかのバラエティーがあるが, この Anger の主張も, 彼女の考え出したものではなく他のテキストの焼き直しである。イブが優位である根拠はこうである: アダムは土くれ (“drosse”; “clay”) から造られたのだから汚らわしい存在である。この土くれは, ある期間をおいたあと, 神によってそれより高位の肉体 (“flesh”) に変えられた (“transformed”)。イブはこの “flesh” から造られたのだから “clay” から造られたアダムよりまさっている。

Protection には, misogyny 言説の中で, 女と結びつけて論じられてきた vice—lust, infidelity, unwise ness, unnaturalness, etc.—が, すべて男のものであると述べられている。そして, 今まで不当に卑められてきた女性が, 正しい扱いを受けるべきとして, 女の本来備わる美点を前面に出して, 女性擁護の主張がなされているのである。しかし少し詳しくみると, この女の復権を企てる Anger の言葉のそこかしこに, ルネサンスの固定化した女性観が顔をのぞかせていることがわかる。たとえばこれは, 女性の優しさがなければ男は生きてゆけないなどということを述べる次のような部分に明らかである。

In women is onely true *Fidelity*: (except in her) there is constancie, and without her *no* Huswifery. In the time of their sicknes we cannot be wanted, & when they are in health we for them are most necessary. They are comforted by our means: they nourished by the meats we messe: their bodies freed from diseases by our cleanliness, which otherwise would surfeit unreasonably through their own noisomnes. Without our care they lie in their beds as dogs in litter, & goe like Mackarell swimming in the heat of sommer. They love to go hansomly in their apparel, and rejoice in the pride thereof, ye

who is the cause of it, but our carefulness, to see that every thing about them be curious. (66)

この引用からは、男の身の回りをあれこれと世話をすることに喜びを感じる、ドメスティックな女性の姿が浮かびあがってくる。女性が世話をするから男の身体は清潔に保たれ、ベッドにも気を配る女性のおかげで、男はきれいな寝床でぐっすり休むことができると語る Anger のことばには、ルネサンスのフェミニストの有する限界性がはっきりと表われているといっても過言ではないであろう。Protection は数多い女性擁護のひとつではあってもその中で主張される女性の優位性は、この後の世紀に現われてくる社会・経済上の女性の権利の主張とは異なるものだったのである。そしてルネサンスのこの女性優位のフェミニズム言説が、皮肉にも、女性を家庭というプライベートな空間へと追いやる役割を無意識に果たしたのかも知れないと考えることは、完全に間違っているとはいきれないように思われる。⁽²²⁾

Notes

- (1) 荒木正純他『特集：文学史の読み直し』（『英語青年』1991年4月号）：2-12。
- (2) CLCS において Barbara Johnson を chair とするセミナー *Theory and Interpretation of Literature* で読まれたペーパーである。筆者の手元にあるコピー原稿によれば、日付は1988年11月となっており、またこれが *The Politics of Literature*, ed. Lennard Davis (1989) に入る予定というメモが付けられている。筆者はこの本を入手していない。ページ数は原稿のページ数による。
- (3) Lillian S. Robinson, "Treason Our Text: Feminist Challenges to the Literary Canon" in *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*, ed. Elaine Showalter (New York: Pantheon Books, 1985), p. 105.
- (4) 高田茂樹, 「新歴史主義の視点から一創造的対話に向けて一」, 『特集：文学史の読み直し』（『英語青年』1991年4月号）：15。
- (5) Maureen Bell, George Parfit & Simon Shepherd eds., *A Biographical Dictionary of English Women Writers: 1580-1720* (Hertfordshire: Harvester

Wheatsheaf, 1990), p. 283. この辞書は、イギリスの cultural materialistic な方法論に近づいたフェミニズムに立脚していて、550人の女性が網羅されている。critical appendix 6 では、キャンノン批判が、ジャンルの拡大をももたらすことが、的確に述べられている。Author-centered literary criticism has no place for a text as this: it records, in the main, what appears to be a pre-prepared conversion service read at the bedside of a sick and elderly woman who 'subscryved' it. Little of it read like direct speech, still less writing, 'by' the woman herself. Though the whole text is presented as 'her' confession, and conversion, the little that may be attributable to the woman herself is difficult to unpick. In refusing to discard this text as not 'by' Helen Livingston, we wish to draw attention not only to the limitations of author centered criticism, but also to the way in which a 'woman's text' could be used as a controlling mechanism by offering its readers a version of her life which satisfactorily normalises and neutralises the challenge posed by her actions. (283)

- (6) *A Biographical Dictionary* では、リプリントよりも批評書を、またこのような特定の女性の作品のみをとり上げる出版社の姿勢が問題にされている。Publishers are beginning to realise that there is a market for work on these writers, but there is still a greater readiness to commission books *about* women writers than reprints of these works. The marketing strategies of publishers, tied to this process of commodification, mean that when reprints do appear the same handful of women is repeatedly reprinted. The tercentenary of Aphra Behn in 1989, for example, has led to more publishers printing the same plays of Aphra Behn, whose writing is now recognised as commodity, rather than publishing the work of her contemporaries, which is not. As it is, Behn remains largely isolated from other writers of her time. (Introduction, xi-xii)
- (7) 外岡尚美,「アジア・フェミニズムの現在」,『フェミニズムの言語—女性文学』(『国文学: 解釈と教材の研究』1992年11月号): 5。外岡氏はまず「西欧社会で発展したフェミニズム理論からとりこぼれる, アジア独自の文化, 社会, 人のあり方に着目した上で, アジアのフェミニズム理論を構築しよう」(53)とする含みを持つアジア・フェミニズムの問題点と理論上の不可能性を指摘したあと, このように続けるのである。
- (8) この翻訳の正式の名前は次の通りである。 *Dedication and Epistle to the Reader in Margaret Tyler's translation of Diego Ortunez de Calahorra, The First Part of the Mirrour of Princely deedes and Knyghthood: Wherein is*

shewed the worthinesse of the Knight of the Sunne, and his brother Rosicleer, sonnes to the great Emperour Trebatio, with the straunge love of the beautiful Princesse Briana, the valiant acts of other noble princess and Knights. dedication と epistle のテキストは次のものを使用した。Moira Ferguson, ed., *First Feminists: British Women Writers 1578-1799* (Bloomington: Indiana University Press, 1985)

- (9) Tina Krontiris, “Breaking Barriers of Genre and Gender: Margaret Tyler’s Translations of *The Mirrour of Knighthood*” in *English Literary Renaissance* 18 (1988): 19.
- (10) Krontiris, p. 20.
- (11) Ferguson, pp. 51-52.
- (12) Katharina M. Wilson は、ルネサンスの人文主義者達の建前と本音を、教育を享受できた女性層に言及しながら、次のように明快に説明している。Education was of central interest to Renaissance humanists, and their great contribution of making learning available to women cannot be overestimated. Theoretically, equal education was advocated for both sexes and for all social classes, but practically, formal education was restricted to the daughters, wives, and sisters of learned men, and to women of the nobility and the upper bourgeoisie. Moreover, the emphasis on learning not for its own sake but as a means of moral improvement . . . is almost omnipresent in the continuity of purpose with the medieval tradition. Katharina M. Wilson, “Introduction” to *Women Writers of the Renaissance and Reformation*, ed., Katharina M. Wilson (Athens: The University of Georgia Press, 1987), xx.
- (13) Wendy Wall, “Isabella Whitney and the Female Legacy,” in *ELH* 58 (1991): 36.
- (14) 正式なタイトルは次の通りである。*Jane Anger her protection for Women to defend them against the Scandalous Reportes of a late Surfetting Lover, and all other like Venerians that complaine so to see overcloyed with women’s kindness.* テキストは次のものを使用した。Moira Ferguson, ed., *First Feminists: British Women Writers 1578-1799* (Bloomington: Indiana University Press, 1985)
- (15) Ferguson の *First Feminists*, p. 59 にこれについての議論がある。また *A Biographical Dictionary* には、Jane Anger の項に、次のように書かれている。Although this name is readily assumed to be pseudonymous, it is with remembering that the family name Anger or Ongar was fairly

common in some counties bordering London (Berkshire, Essex). Further, the formation of a female pseudonym is usually at this time either comically obvious (Mary Tattlewell) or focused on a specific, known male (Ester Sowernam, Elizabeth Cromwell). (7)

- (16) R. Howard Bloch, "Medieval Misogyny" in *Misogyny, Misandry, and Misanthropy*, eds. R. Howard Bloch and Frances Ferguson (Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1989), p. 1.
- (17) Bloch, p. 1.
- (18) この大きな問題を論じるのは筆者の手に余るが、この方向性を示唆してくれたのは池上俊一氏の『魔女と聖女：ヨーロッパ中・近世の女たち』（講談社現代新書）である。氏の本は、啓蒙書という性格を持つ新書であるため、問題点は整理され、読み易く並べられているが、それらの問題点はひとつひとつ今後の研究を待つ大きなものである。たとえば、「女性の文化は存在したか」という問いは、「女性の書きものはそれ自体としてひとつの伝統を形成していたのか」という形で今後英文学の領域で考えてゆかなければならないものであろう。
- (19) Alcuin Blamires, Karen Pratt and C. W. Marx eds., *Woman Defamed and Woman Defended: An Anthology of Medieval Texts* (Oxford: Clarendon Press, 1992), p. 51.
- (20) Linda Woodbridge, *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986), p. 13.
- (21) Woodbridge, p. 64.
- (22) 池上俊一氏の『魔女と聖女：ヨーロッパの中・近世の女性たち』は、次の言葉でこれを暗示している。「16世紀の人文主義者や宗教改革者、あるいは17, 18世紀のモラリストは女性の家における地位の上昇や、母の役割のすばらしさを説いた。しかしこれは同時に、社会においては女性は周縁化され、家に閉じこめられることを意味していたのである。「男は仕事、女は家庭」という分業がたかだかと宣言される。(252)

Bibliography

I. Primary Sources

Anger, Jane. *Jane Anger her protection for Women to defend them against the Scandalous Reportes of a late Surfeiting Lover, and all other like Venerians that complaine so to see overcloyed with women's kindness.* In *First*

Feminists : British Women Writers 1578-1799, ed. Moira Ferguson. Bloomington: Indiana University Press, 1985.

Tyler, Margaret. *Dedication and Epistle to the Reader in Margaret Tyler's translation of Diego Ortunez de Calahorra, The First Part of the Mirrour of Princely deedes and Knyghthood: Wherein is shewed the worthinesse of the Knight of the Sunne, and his brother Rosicleer, sonnes to the great Emperour Trebatis, with the straunge love of the beautiful princesse Briana, the valiant acts of other noble Princess and Knights*. In *First Feminists: British Women Writers 1578-1799*, ed. Moira Ferguson. Bloomington: Indiana University Press, 1985.

II. Secondary Sources

- 青木和夫他, 『イギリス・ルネサンスの諸相: 演劇・文化・思想の展開』東京: 中央大学出版部, 1989.
- Beer, Gillian. *The Romance*. London: Methuen & Co. Ltd, 1979.
- Bell, Maureen; Parfit, George; and Shepherd, Simon, eds. *A Biographical Dictionary of English Women Writers: 1580-1720*. Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1990.
- Blamires, Alcuin; Pratt, Karen; and Marx, C. W., eds. *Woman Defamed and Woman Defended: An Anthology of Medieval Texts*. Oxford: Clarendon Press, 1992.
- Bloch, R. Howard. "Medieval Misogyny" in *Misogyny, Misandry, and Misanthropy*, eds. R. Howard Bloch and Frances Ferguson, 1-24. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1989.
- Cerasano, S. P., and Wynne-Davies, Marion, eds. *Gloriana's Face: Women, Public and Private, in the Early English Renaissance*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- 『英語青年』第137巻・第1号(4月号). 東京: 研究社, 1991.
- Feather, John. *A History of British Publishing*. 1988. 箕輪成男訳『イギリス出版史』東京: 玉川大学出版局, 1991.
- Ferguson, Margaret; Quillian, Maureen; and Vickers, Nancy, eds. *Rewriting the Renaissance: The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1986.
- Ferguson, Moira. *First Feminists: British Women Writers 1578-1799*. Bloomington: Indiana University Press, 1985.
- Graff, Gerard. "Theorizing the University" (manuscript). 1988.

- 池上俊一. 『魔女と聖女：ヨーロッパの中・近世の女たち』（講談社現代新書）。東京：講談社，1992.
- Joël, Constance. *Les filles d'Esculape—Les femmes à la conquête du pouvoir médical* 1988. 内村瑠美子訳『医の神の娘たち～語られなかった女医の系譜～』吹田：メディカ出版，1992.
- 『国文学：解釈と教材の研究』第37巻・13号（11月号）。東京：学燈社，1992.
- Krontiris, Tina. “Breaking Barriers of Genre and Gender: Margaret Tyler’s Translations of *The Mirroure of Knighthood*,” *English Literary Renaissance* 18 (1988): 19–39.
- Laslett, Peter. *The World We Have Lost*. 1983. 川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界』東京：三嶺書房，1986.
- Mertes, Kate. *The English Noble Household 1250–1600: Good Government and Politic Rule*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Miller, Nancy, ed. *The Poetics of Gender*. New York: Columbia University Press, 1986.
- Robinson, Lillian. “Treason Our Text: Feminist Challenges to the Literary Canon.” In *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*, eds. Sandra Gilbert, et al., 105–121. New York: Pantheon Books, 1985.
- Scott, Joan Wallach. *Gender and the Politics of History*. 1988. 萩野美穂訳『ジェンダーと歴史学』東京：平凡社，1992.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*. New York and London: Routledge, 1988.
- Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage In England 1500–1800*. New York and Cambridge: Harper & Row, Publishers, 1979.
- Wall, Wendy. “Disclosures in Print: The “Violent Enlargement” of the Renaissance Voyeuristic Text,” *SEL* 29 (1989): 35–59.
- . “Isabella Whitney and the Female Legacy,” *ELH* 58 (1991): 35–62.
- Wilson, Katharina M., ed. *Women Writers of the Renaissance and Reformation*. Athens: The University of Georgia Press, 1987.
- Woodbridge., Linda. *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540–1620*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986.